

松阪花菖蒲 (Matsusaka Iris)

松阪花菖蒲は一般には伊勢花菖蒲(イセハナショウブ)とも呼ばれ、江戸花菖蒲・肥後花菖蒲とともに日本を代表する古典園芸植物の一つです。

松阪花菖蒲の起源は松坂城下・殿町に住む徳川紀州藩士であった吉井定五郎(1776~1818)がノハナショウブから品種改良されたのが始まりとされ、その子息の吉井政之助、孫の吉井吉之丞と三代にわたり多くの品種を作出したと伝えられている。

花は三英咲で、分枝しない。外花被(弁)は縮緬(ちりめん)地の薄弁で大きく発達し、深く垂れるのが特徴である。

1952年(昭和27年)に三重県教育委員会により松阪花菖蒲は、松阪撫子・松阪菊とともに天然記念物に指定された。また、1970年(昭和45年)には花菖蒲を県花に決定された。

松阪三珍花保存会のあゆみ

●松阪三珍花保存会の発足

松阪公民館に勤務していた森智子は1969年(昭和44年)旧知の岡村金蔵が戦前より「松阪三珍花」の研究・育成・栽培を、今もやっていることを知り、県の文化財や植物関係の文献・書籍から、この3種の花が徳川時代から引き継がれてきた松阪市発祥の貴重な花であることを知った。

森・岡村は、1970年(昭和45年)に公民館講座として「松阪三珍花・園芸講座」を撫子・岡村、花菖蒲・青木清次郎、菊・中井喜一の指導にて開講した。

1971年(昭和46年)、伊勢(松阪)三珍花の研究を精力的にされていた三重大学富野耕治教授の講演会を期に、グループの名称を「松阪三珍花の会」とし、初代会長を石田小吉とし本格的な活動に入った。

その後、松阪市教育委員会より三珍花保存の指定を受け、会の名称も「松阪三珍花保存会」と改め、名実ともに、現在の保存会が誕生した。

●松阪三珍花保存会の活動状況

会の目的は松阪三珍花の品種(系統)保存とその普及活動である。

創立以来、松阪公民館(後に幸公民館)を活動拠点として毎月1回例会を開催し「松阪三珍花の栽培・管理学習会」、「情報交換、苗・種の交換会」などを行っている。

主な活動は、5月の「松阪撫子展」、6月の「松阪花菖蒲展」、11月の「松阪菊展」の開催である。

展示会は会の創設以来、松阪公民館で行ってきたが現在は、本町の豪商ポケットパークで開催している。

その他には、緑化活動も創立間もないころより「中部台公園菖蒲池」への移植、花の種・苗の配布、各地の展示会への出展などを実施し、現在は鈴の森公園内で、松阪花菖蒲「古花、新花」の栽培・管理を行っている。

渉外活動として「撫子」では京都府立植物園・三重県農業研究所、「花菖蒲」では加茂荘花鳥園・日本花菖蒲協会などと「菊」では新宿御苑・国立歴史民族博物館くらしの植物苑などと交流を行ってきた。



松阪三珍花保存会設立 50 周年記念

「松阪花菖蒲展」令和 3 年(2021 年)6 月 9 日~13 日



乙女



羽衣舞



龍巻



松阪司



松阪三珍花



松阪撫子



松阪花菖蒲



松阪菊